

〈書評〉

山崎明子・池川玲子・新保淳乃・千葉慶・黒田加奈子著
『ひとはなぜ乳房を求めるのか
——危機の時代のジェンダー表象』

(青弓社 2011年 213頁 ISBN 978-4787233288 1,600円+税)

味岡 京子



ひとはなぜ乳房を求めるのか。一見「普遍的」とも思える問いだが、はたしてそうだろうか。たしかに、乳房をテーマとした著作は少なくなく、たとえば本書にも挙げられているように、ロミ『乳房の神話学』やヤーロム『乳房論——乳房をめぐる欲望の社会史』では、古代から現代に至るまであらゆるメディアにおいて表象されてきた膨大な数の乳房表象が、いかに人々に欲望されてきたかが、ジェンダー論的視点も含めた多角的側面から分析されている。より新しいところでは、乳房の世俗化に焦点を当てたマーガレット・マイルズの*A Complex Delight: the Secularization of the Breast, 1350-1750*なども、冒頭の問いへの答えの一部をなす論考といえるだろう。ただしこれらは皆欧米の研究書である。

では日本ではどうか。歴史的にどれほど乳房が表象されてきたかは、先のような網羅的な研究が確認できていないため定かではないが、すくなくとも近代化とともに西欧から裸体画がもたらされた明治以降、日本においても乳房は断片化された女の記号として、あらゆるメディアで表象され続けてきた。とりわけ日本が世界の注目を集めるマンガ・アニメ文化において美少女の乳房が大きな存在感を占めていることは誰の目にも明らかであり、そこには日本特有とも思える乳房への執着すら垣間見ることができるとは言い難く、乳房（表象）をテーマとする日本の著作の多くが「乳房を持たない者」たちによる神話的情緒的議論や心理学的側面からの分析に終始している¹。

誤解を恐れずにいえば、日本は男性の欲望に「寛大」な国である。もちろん乳房の表象は男性の欲望の対象としてのみ生み出されてきたものではない。母性や慈愛、ときに国家的イデオロギーなど複層的な意味を担って表象されてきた。しかし、そのほとんどが男性によって作り出されたものであったことは事実である。そもそも女性の身体そのものが圧倒的に「見られ」「消費される」客体であった。この点はおそらく古今東西共通する。しかしどれだけそのことに自覚的になれるかという点に留意するならば、議論がなされる土壤があるかないかで、とりわけ見る側の意識は大きく異なってくる。欧米（おもに英米）ではすくなくともそれが建前上であったとしても正当なものとして議論の俎上に挙げられている。一方日本においては（一部の議論を除いて）「議論」すること自体が「野暮」だとされ、フェミニズムに対する揶揄が無造作に書きつけられる。揶揄を恐れて口を閉ざす。これが日本の現状である。日本独自の「萌え」という要素には小乳（ポジティブな意味合いでは「貧乳」と呼ばない）がふさわしいか、ロリコン顔には巨乳がよいかという議論が真面目に哲学的なものとして扱われる権利があるとするれば、乳房表象が男性の幻想によってにせよ、社会の要請によってにせよ、それが生み出される構造自体をフェミニズムの観点から徹底的に分析・議論する権利があっても構わないはずだが、刊行されている著作を見る限りにおいて活発に行われているとは言いがたい。

前おきが長くなったが、本書はこうした状況の中で批判的視点を明確にした上で編まれたものであることをまずは強調しておきたい。つまり、とりわけ日本においてはきわめて貴重かつ勇気ある試みの著作であり、本書の刊行によって、こうした議論が一般に認知される契機になるとすれば大きな意味がある。しかしもちろん、日本がようやく欧米の研究に追いついたというようなことを言いたいのではない。本書は従来の欧米の研究とも異なる視点で、一見「普遍的」と思える問いに対し、より核心に迫る問いを立てて分析を行っており、日本という枠を越えた先駆的で独創的な試みとなっている。

本書の編者でもあり論文も寄せている山崎明子が「はじめに」において本書の意図を簡潔に述べている。普段乳房は隠されているが、その乳房（の表象）が、突如社会に求められ登場する契機がある。その契機を「危機」と想定し、その「危機」を読み解くことが目的だとする。いかなる「危機」において、乳房の表象が求められ生産され、そして消費されるのか。本書のタイトル「ひとはなぜ乳房を求めるのか」とはこの意味においてである。「危機」に際して、社会の秩序回復を試みようとして権力が姿を現す。乳房の表象がそのために利用されるというのである。その具体例が各章で示されてゆく。したがって本書は、乳房の表象そのものの分析ではなく、隠されているべき乳房が可視化されるための特定の文脈、それを要求する社会の構造を「危機」として暴き出すことのほうに重点が置かれている。そしてこの「危機」に注目した点が本書の最大の特徴であり、乳房の表象を網羅的に扱った過去の大著と大きく異なる点である。

続く5編の論文は、扱う時代、地域、メディアは異なるが、この意図が十分に共有されているため、全体として説得力ある構成となっている。乳房＝授乳、レイプ＝乳房の露出・凌辱、裸体（裸婦）＝乳房という連鎖的なイメージもここには含まれているが、本書の意図に照らし合わせた根拠が各論者によって示されており強引さは感じられない。欲を言えば、それらを「＝イコール」で結ぶことの意味（蓋然性）がもう少し詳しく説明されていればより説得力が増したのではないかと思う。ここに論文を寄せている5人の論者は、美術史研究者であると同時に、それぞれが「美術史」という学問の枠を越えて視覚文化全体を研究対象としながら学際的アプローチを試みようとする研究者たちである。いわゆるプロパーの美術史ではおそらく語りつくすことができない学際的研究の可能性もここには提示されている。対象や研究方法が広がることによってときに起こりうる恣意的な展開は感じられず、先行研究を踏まえ、真摯に議論が重ねられている。以下、若干の私見を加えながら各章を概観していきたいと思う。

冒頭の黒田加奈子「男／女の差異化——医学的言説における乳房」は、あとに続く章を理解するために踏まえておくべき前提として重要な論考を提示している。論者は、医科学的言説が時代・地域のジェンダー規定を作り上げ補強したという立場に立って、古代ギリシアから14世紀までの権威ある古典的テキストを再読している。人体とはこれを議論する主体である男性のそれであり、女性の身体は不完全なものとして規定されていた。これを根拠として男性中心的宇宙（＝社会）の価値観が客観的なものとして正当化されていく。まずはこの点を前提としながら乳房に焦点を絞った分析がなされていく。「女性」の出産という「危機」に直面した「男性」医師によって、「優秀な子孫」育成のための方策として「良質」な母乳の重要性が説かれ始める。ここで示された乳房の役割が、後世の乳房表象を支える言説の土台をなしていくと指摘する。つまりすべての乳房が、「良き乳房」と「悪しき乳房」の二項対立に分類されていく（この観点は本書を通して貫かれている）、その起源ともいえる言説がここに提示されている。

続く山崎明子「美の威嚇装置」では、乳がん撲滅を目指して早期発見・早期治療を訴えるピンクリボンキャンペーンが近年突出した活動を見せているとして、そのポスターや周辺に現れる乳房の表象が持

つ意味を分析する。キャンペーンはすべての女性に対し「いつ誰がかかるかわからない」という不安を掻き立てることによって「危機」を創出しながら、一方でそれを支えるものとして、既存のイメージに依拠した女性性の記号としての乳房や、「乳がんでないひとの（美しい）身体」を表象する。病む身体や乳房の喪失という「真の危機」はけっして視覚化されない。ここで突きつけられているのは、乳がん＝死という病に対する恐怖ではなく、実は乳房を失うこと＝美の破壊、あるいは女性としてのアイデンティティー喪失という恐怖なのだということを論者は喝破する。「健康と病」が「美と醜」に還元され、それが「美の威嚇装置」と化し、乳房を持つ「すべて」の女性に不安をつきつける結果となる。ただし論者も言っていることだが、キャンペーンを批判することに意味があるのではなく、ここで問われていることは、視覚化され消費され続けてきた乳房の表象を前にして、これは誰のための表象か、これを見ている自分は何かと自らに問うこと、すなわち見る者の姿勢なのである。

池川玲子「〈聖戦〉論理の構築」は、15年戦争下という大規模な生命の破壊という「危機」の時代に総力戦のためのプロパガンダとしての機能を担うことになった日本映画に着目し、そこに現れた乳房表象を、授乳＝次世代育成力という観点から分析する。政治的・軍事的目標が異なる局面ではそれぞれ授乳イメージにも異なる意味が担わされていたとして銃後映画（自国）、戦地・占領地映画（他国）、満州移民映画（植民地）という三つのカテゴリーに分類し論じていく。銃後映画では、それまで許容されていた（若い乳房の）エロチシズムや（老いた乳房の）過剰な母性が入り込む余地がなくなり、母たちの乳房は「乳離れ」の儀式を経て「聖戦」に男児を捧げる国家的母性を構築するものとなっていく。戦地・占領地映画では、授乳できない中国人／授乳を助ける日本人というイメージを通し、悪である中国人／正義の日本人が創出される。満州移民映画では、「貧相な女性（＝枯れ果て病んだ乳房）」が「枯渇した日本」の隠喩として表象され、「豊饒な大地」たる満州に植民地支配の要としての人材を送り出す機能を果たす。かくして若／老、善／悪、健康／病といった二項対立で乳房が二分され、その対立的図式によって「聖戦」論理の正当性が捻出されていく。説得力ある展開だが、最後に戦後の二つの「授乳」イメージを敢えて提示した意図がやや曖昧なままのように思える。論点が異なってくるためであろうが今後の論考に期待したい。

新保淳乃「都市秩序の再生」は、近世イタリアに現れたペスト犠牲者の乳房に注目する。大量の命を奪う死の病ペストの大流行は、都市秩序の崩壊という「危機」をはらむものであった。この「危機」に直面し、都市行政府は秩序回復を狙ってペスト図像を作りだす。それらには「乳房をむき出しにした死せる母とその乳房にすがる乳児」がモチーフとして描きこまれていた。秩序再生のためになぜ一見負の要素とも思える犠牲者の乳房が可視化されなければならなかったのかを、聖母マリア＝良き乳房（の持主）と、ペスト犠牲者の乳房＝授乳できない（しない）乳房＝エバの乳房＝悪しき乳房と連鎖していく二つの対極的なイメージを軸として読み解いていく。キリスト教文化においては、神に背いたエバと救済の道を開いたマリアという確固たる二元論が打ち立てられていた。ペストを悪徳に対する神罰とみなす考えがこれに重ね合わされる。救済の対象であるはずの授乳できない犠牲者の乳房を、エバを想起させる図像で表すことによって、都市の秩序を崩壊させる（神罰を受けてしかるべき）存在として弾劾しようとする。観者である女性信徒はマリアと同一視することが禁じられていたので、犠牲者の授乳しない「悪しき乳房」と否応なく対峙させられることになる。つまり（マリア以外の）すべての女性に不安を抱かせ、授乳する存在であると威嚇することによって都市の秩序を回復しようとしたのである。この図式が丹念に解説されている。途中、犠牲者は貧民と同一視され他者化されるという見解が提示されて

いる。これに対しジェンダー観がどう関連するのか、あるいはしないのか、より複層的で大きな枠組みが示される時が来ることを期待する。

千葉慶「男性優位のジェンダー秩序の再編／強化」は、ポルノ映画に現れたレイプ（による乳房の露出／凌辱）の表象を分析する。一般的には、とりわけ「レイプ神話＝犯したい男／犯されたい女」が自明の前提ともいえる現代のポルノは男性優位のジェンダー秩序をなによりも強化するものとして認識されており、そのこと自体否定しがたい事実であろう。しかしながら論者は、「レイプ神話」に対するこうした単一的な解釈の裏に隠蔽されている両義性を、レイプ表象の変遷を社会背景に照らし合わせながら丹念に見直すことによって明らかにする。60年代、男性性の「危機」への処方箋としてレイプ表象が登場する。この段階では性犯罪行為を正当化する言い訳として、同時代的社会への抵抗という「劣情有理」のレトリックが用いられていた。次第に「レイプ神話」が自明となっていく。これをジェンダー秩序の再編・強化を呼びかけるイメージへと変貌するプロセスとして読み解いていくが、論者はさらに、その過程においても劣情有理のレトリックの残余が内包されていたこと、そして神話が定着すればするほど逆に神話の作為性が露呈する結果ともなっている点を指摘することによって、「レイプ神話」の自明性を踏み破る契機を提示しようとする。表象の暴力が現実の暴力行為を許し、正当化し奨励しかねないという中、こうした議論の意義ははかりしれないほど大きい。だからこそ一点だけ指摘しておきたい。冒頭で不特定多数の目に乳房がさらされることはジェンダー秩序の安定を「危機」に陥れるものであり、したがって、暴力的なやり方で乳房が可視化されるポルノ（レイプ）はジェンダー秩序の「危機」を表すものだとする前提が提示されているが、評者の観点からは、どう解釈しても「再編・強化」するものでしかありえない。なぜレイプが本来ジェンダー秩序を「危機」に陥れるものであるのか。この前提に関して誰もが納得する説明がもう一言ほしいところであった。

以上、各論考を概観することによって、本書の意義をより明確に確認することができたのではないかと思う。最後につけ加えるなら、なぜ乳房の表象を求めるのか、という問いへの答えを考えることは、「どのようにそれと向き合っていくべきか」という、それを受容する受け手のあり方を自らに問いただす試みでもある。そのことを本書は問いかけている。

（あじおか・きょうこ／お茶の水女子大学文教育学部アカデミック・アシスタント
明治学院大学ほか非常勤講師）

注

- 1 近年、中世の宮廷における「乳母」に焦点を当てた考察『乳房はだれのものか——日本中世物語にみる性と権力』（木村朗子著、新曜社、2009年）が刊行されたことは本書と共に注目に値する。

参考文献

- Romi, *Mythologie du Sein*, Paris, Jean-Jacques Pauvert, 1965. (ロミ『乳房の神話学』高遠弘美訳、青土社、1997年)。
Yalom, Marilyn, *A History of the Breast*, New York: Alfred A. Knopf, 1997. (マリリン・ヤーロム『乳房論：乳房をめぐる欲望の社会史』平石律子訳、リプロポート、1998年)。
Margaret R. Miles, *A Complex Delight : the Secularization of the Breast, 1350-1750*, Berkeley, CA: University of California Press, 2008.